What we can do News paper

発行人：川岸聖奈、川嶋裕珠、木谷衣里、吉田絢菜

今、私たちにできることは・・・

命をかけてでも日本を守る

先日、親和女子中学校で行われたリビングライブラリーにお越しくださった防衛省の方々に自衛隊の震災時についてお話を伺った。

まず、自衛隊は陸上自衛隊、海上自衛隊、航空自衛隊の3部隊から構成されており、震災時にはそれぞれの部隊がそれぞれの活動を行っている。

阪神淡路大震災(兵庫県南部地震)では自衛隊史上最大規模の災害派遣が行われ

・人員…延約1640000人　・車両…延約347000両

・航空機…延約7000機

もの災害時派遣が行われたのだ。3期に分かれた災害時派遣。まず、第1期の1月17日から1月19日では人命救助活動が主に行われた。この3日間で生存救出できたのは142名。御遺体収容されたのは775遺体でした。また、事後生存救出できたのは15名。御遺体収容されたのは446遺体だ。これだけ見ても明らかに死亡者の方が多いことがわかる。

次に1月20日から3月16日までの第2期では生活支援活動が主に行われた。この活動では、給食、給水、輸送、入浴、医療、天幕支援、物資管理を全期間で行った。

・給水支援…32092t　・給食支援…577273食

・入浴支援…515459人　・医療支援…20918人

・ゴミ処理…2106t

そして3月17日から4月27日までの第3期には生活支援活動および倒壊家屋処理活動が行われた。この活動は全国から施設部隊の増援を得て実施した。倒壊家屋処理はなんと2599戸もあった。考えただけでもしんどくなるような活動である。

これだけの多大な支援を行ってくれた自衛隊の方々に感謝したいと思った。

これらの災害派遣は「人命と財産を守るため」だと防衛省の方がおっしゃっていた。

命をかけてでも日本を守ってくれている自衛隊の方々に、これからくる災害において今、私たちができることを伺った。

1.家族と話し合う

2.3日分の食料と飲料を用意する

3.防災訓練に積極的に参加する

このように簡単なことでも自分や家族などの命を守ることができるので家に帰って一度見直してみてはどうだろうか。（木谷衣里）

「しあわせ運べるように」作詞作曲

先日のリビングライブラリーで、震災復興を願う合唱曲「幸せ運べるように」の作詞・作曲者である臼井真氏が阪神淡路大震災についてとても貴重なお話をしてくださった。

臼井氏は阪神淡路大震災で東灘区の自宅が全壊し、震災から約2週間後身を寄せていた親戚宅で、変わり果てた神戸の街の姿をテレビニュースで見て衝撃を受け、わずか10分で「しあわせ運べるように」を作詞・作曲した。

臼井氏がこの曲を作曲しようと思ったきっかけは、1度死んだしまった神戸をもう1度よみがえらせるため、また、震災で亡くなった方々を忘れないようにようにするため、そして、子供をなくした方の親の心は辛くても繋がっていると思ったことからだとおっしゃっていた。

「幸せ運べるように」の曲の題名には子供たちの歌声で、この歌を聞いた人の心の傷が少しでも小さくなるようにという意味が込められている。また臼井さん自身が被災して神戸のことを愛おしく思うようになり、当たり前の幸せに感謝するようになったそうだ。

そして皆さんはこの曲に手話が入っていることをご存じだろうか。心を込めた手話を入れることで歌っている人の心が本当に伝わるのだと、臼井氏はおっしゃっていた。

この曲は、多くの人々の心を捉え希望の灯となり、神戸復興を願うシンボル曲になった。神戸では市内の小学校をはじめ、追悼式典、KOBEルミナリエ、成人式等で、25年間大切に歌い継がれている。

また、英語、中国語、フランス語、ペルシャ語、トルコ語、イタリア語、カンボジア語、ハンガリー語、ミャンマー語、ネパール語、韓国語に訳されて海外でも歌われている。

臼井氏は38年間、神戸市内の小学校で音楽の教師をし、これまでに600曲もの曲を作曲した。そして昨年、教師を定年退職し現在は神戸親和女子大学の准教授として次の世代の「先生」を育てる道を歩み始めいる。

私たちは臼井氏の歌に込められた思いをこれからも伝えていきたいと思う。（木谷衣里）

阪神淡路大震災

地震名　平成7年(1995年)兵庫県南部地震
発生年月日　平成7年1月14日午前5時46分
発信地　淡路島北部
震源の深さ　16km(北緯34度36分、東経135度02分)
規模　マグニチュード7.3
最大震度　7
主な被災地　兵庫県
被害　死者　:6,434名　行方不明者:3名
負傷者　:43,792名　住家全壊　:104,906棟
住家半壊　:144,274名　全半焼　:7,132棟

東日本大震災

地震名　平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震
発生年月日　平成23年3月11日14時46分頃
震源地　三陸沖　約130km付近
震源の深さ　24km
規模　マグニチュード9.0
最大震度　7(宮崎県栗原市)
主な被災地　北海道から千葉
津波の高さ　青森県から茨城県にかけて約4m～6m
被害　死者　:19,747名　行方不明者:2,556名
負傷者　:6,242名　住家全壊　:122,005棟
住家半壊　:283,156棟　一部破損　:749,732棟

三万枚のマスク

アスベストは昔、燃えにくく、加工もしやすく、材料特性が優れており、「奇跡の鉱物」と言われ重宝されていた。学校などにも盛んに使われていて、すぐ身近にアスベストがあった。

しかし、アスベストは吸い込むと健康に害する。肺がんや悪性中皮腫などを起こしてしまう。その上、アスベストは人の髪の毛の五千分の一の細さで、吸い込みやすい。現在では、原則使用を禁じるほど、危険な鉱物なのである。

阪神淡路大震災のとき、アスベストが商店街中に散乱してしまっていた。家が壊れて、外で寝ていたりしていた人が、吸い込んでしまってはその人たちの健康が害される。

そこでマリ・クリスティーヌ氏はボランティアで、被災地にマスクを配ることにした。アスベストを吸い込んでしまわないように。マリ氏は「アジアの女性と子供ネットワーク（AWC）というボランティア団体を設立し、お互い様のプロジェクト（困った時はお互い様というプロジェクト）を開始したり、8校もの学校を建設したりと数々のボランティアをしておられた。マリ氏は約250万円もの大金をかけて、三万枚のマスクを用意した。東京から大阪まで行き、大阪から八時間かけて神戸まで来た。

マリ氏はまず、芦屋でマスクを配った。芦屋では芦屋市長の部屋の前まで市民が避難をしており、あたりが段ボールだらけだった。

次にマリ氏は神戸市にきた。マリ氏はマスクを寄付し、自分で被災地の人に配った。

被災地の人はマスクより、食べ物を欲しがった。そこでマリ氏はアスベストの危険性を説明し、アスベストについての知識を提供した。

最後に、マスクがないときのアスベストから身を守る方法を一つ、紹介しよう。まずはハンカチを濡らし、そのハンカチで口と鼻を押さえる、と言う簡単なものだ。アスベストは使用禁止になったが全ての建物から消えたわけではない。アスベストが飛散している可能性がある場所では、是非、この方法を試してみてほしい。

（川嶋裕珠）

これまでの 被害
これからくる 災害

震災ボランティアの活動をしていた山路新太郎氏

津波で被災したところは家の中や周りに泥や瓦礫などがたくさん入り込む。それらを片付けるのが震災ボランティアの活動内容だ。他にも家の大事な物、例えば家族写真やアルバムなどの思い出を回収したりする。汚れた写真などを綺麗にするのは他のボランティアの人たちがやってくれる。

このようにボランティアにはたくさんの種類があり、それぞれ活動している。

例えば、募金活動、高齢者、障害者や子育ての支援活動、環境保全活動、街づくり活動や防災、災害の被災者支援活動などといったものだ。

今回、山路さんが行ったボランティアは震災ボランティア。上記にあげたボランティアで部類を分けるのであれば防災、災害の被災者支援活動の部類であろう。活動した場所は東日本大震災で大きな打撃受けた東北地方の宮城県。東北地方最大の人口を持つ宮城県仙台市は文化、経済の中心で漁業や農業が盛んである。そのため、家の中に入り込む泥などに、ガソリンなどの油、魚や生き物の死骸、そして馬や牛などにあげる餌などが混ざり合って泥には異臭が漂う。片付けをする際に、マスクは必需品で、マスクをしても到底補えない程の臭いが充満していた。そんな中で片付けをするから服は泥まみれになるので服は捨てる。服やマスクはボランティアセンターから支給される。

ボランティア活動をしてる際に必ずしも相手から感謝の言葉は来るとは限らない。相手は被災された人だ。家族とも連絡が中々取れない中、片付けを手伝ってくれている人に感謝を述べる余裕があるのか。絶対にあるとは確信が持てない。逆に八つ当たりといったこともあり得るだろう。

ボランティア活動は『やり甲斐があるから』、『良い経験になるから』、と言った自分への利益を求めてはいけない。今回の防災、災害の被災者支援活動は他のボランティアより厳しいものである。普通に暮らしていて見ることはないことを見る覚悟があるのかが問題である。

今回の講演会で自分が思っていたよりも、被災したところは厳しい状況に陥っていたと分かった。

そんな震災はこれからも起こり続ける。

私たちにできることはなんだろうか。（吉田絢菜）

天災は忘れた頃にやって来る

日本の政治家であり国民民主党所属の衆議院議員である玉木雄一郎氏。

今回の講演会では主に自分の経験をお話ししてくださった。

東日本大震災では震源地が東北なのにもかかわらず東京都でもとても震度が大きかったという。

さらには津波がCGのようで逆流をしていくこともあった。

建物も破壊されまくり、ひと目見ただけでわかるほどとても悲惨な状態だった。

このことに関して玉木氏は地震が起こった時は「人のことより自分のこと」と何より自分だけでも助かることが大切だとおっしゃっていた。

すごく心が痛むことかもしれない。

だけど自分を一番守れるのは自分しかいないということをしっかり伝えてくれる言葉だと思う。

また、一番私が心に残ったのは「天災は忘れた頃にやって来る」という言葉である。

この言葉は玉木氏の言葉ではなく、科学者、随筆家であった寺田寅彦氏の言葉なのだが、みなさんもすごく納得できる言葉だと思う。

そして、この言葉から感じ取れることはズバリ「油断禁物」。

いつどこで震災が起こるかわからない。

そんなのわかっていれば対策なんて今頃思いついているはずだ。

だからこそ備えや、地震が起こった時どうするかなど今から考えてみることが大切だと思う。

ほんの少しでも家族と震災時のことを話しあってみる、缶詰、水などの生活必需品をしまっておく。たったこれだけです。

このことがこれからの自分、さらには周りの人々を救うかもしれない。

質問コーナーではたくさんの質問に答えていただいた。

その中でもとても興味深いのが復興する際の優先順位についてだ。

一番大切なのは道路を復興することだそうだ。私はこれが衝撃的だった。

なぜなら避難してあまり外に行くこともなさそうなのに道路工事の優先順位が一番高かったからだ。

このように今回の講演会では私たちのためになるお話をしてくださった。

とても素敵な講演会をありがとうございました。（川岸聖奈）

1人でも多くの命を助けよう

DMATとは「災害急性期に活動できる機動性を持ったトレーニングを受けた医療チーム」であり、災害派遣医療チーム　Disaster Medical Assistance Team　の頭文字をとって略したものである。

今回の講演会ではDMATの最高責任者、中山伸一氏がお話ししてくださった。

DMATは3割が医者、3割が看護師、残りの4割が薬剤師で構成されている。

DMATは"一人でも多くの命を助けよう"を座右の銘として活動している。

阪神淡路大震災では備えをしていなかった。

20秒ほどのゆれにより大きな被害となり、医療施設も被害にあってしまった。負傷者がたくさんいたため、その中には治療してもらえず数え切れないほど危ない状態の人もいた。病院によってできることが違い、自然災害、人為災害、特殊災害により需要と供給のアンバランスが起こり、本来なら救える命まで救えなかった。

中山氏はその時について病院へ早く搬送できていれば助かった命があったかもしれないと語っていた。

なので、その反省を生かし、情報通信、医師が災害現場で医療を行うなどの改善を行った。

そして厚生労働省が発足させた緊急時に派遣されるチーム、まさにDMATができたのである。

DMATのしくみはまず災害医療センターで状況を把握、そして次に都道府県等の派遣要請を受け、DMAT指定医療機関から派遣され、活動を行う。

DMATの活動は被災地外に患者を航空搬送する広域医療搬送

トリアージ、診療支援などの病院支援、被災地内外に患者を航空搬送する地域医療搬送、緊急治療・がれきの下の医療などの現場活動がある。

このようにDMATは知れば知るほどかっこいいチームだった。

とても有意義な時間をありがとうございました。

（川岸聖奈）

リビングライブラリーを終えて

今回の講演会でたくさん地震のことを詳しく知ることができてとても良かったです。これからも災害とは嫌だけど付き合っていかないといけないので、気をつけて行きたいと思いました。今回このメンバーと一緒にこの新聞を作れて良かったです。この新聞が1人でも多くの方々に届きますように。（川岸聖奈）

地震の話は小学校や家庭でも話したりはしましたが、こんなにたくさん知る機会は中々ありませんでした。アスベストという危険な存在を知ることができてよかったです。全てのアスベストが無くなったわけではないので、これからは、アスベストが飛んでいそうなところ（工事中の場所など）では、しっかりと対策をしようと思います。（川嶋裕珠）

今回のリビングライブラリーで6人の講師の方にお話を伺い、インターネットや本では学ぶことができないような情報を知れて、とても貴重な体験ができたと思います。震災に関わっているさまざまな方の活動や協力のおかげで今の日本があるんだなと思いました。震災を体験したことがない私たちがもし体験することになってしまったとしても、今回学んだことが活かせるようにしたいです。本当にありがとうございました。（木谷衣里）

東日本大震災や阪神淡路大震災などといった災害は実際に見たりや体験したことも無くて実感が湧かなかったですが、今回の講演会で実際に現場に行った人や体験した人の話が聞けてとても勉強になりました。私は山路新太郎氏の講演しか聞いていませんが、班員の講演会での感想や思ったことが聞けて良かったです。この貴重な体験を大事にしていきたいなと思います。（吉田絢菜）